

昔むかし。お百姓のじいさんとばあさんがいました。

ある日、鳥が一羽飛んで来て、田んぼのお米を食べはじめました。じいさんは、腹を立てて、鳥をつかまえると、

「ばあさんや。こいつをしばらくから、縄を持ってきてくれないか」といいました。すると、鳥がいました。

「どうかわたしを放してください。いい物をさしあげますから、わたしについてきてください」

じいさんは、鳥を放して、あとについて行きました。鳥は、やがて大きな穴の中に入って行きました。じいさんは穴の外で待っていましたが、鳥は出て来ません。そこで、穴の中に向かって、

「おおい、いい物はどこにあるんだ」とさげびました。すると、鳥がまだらの雌牛を連れて出てきました。そして、

「この雌牛をさしあげます。でも、あなた、家に帰っても、『まだらの雌牛よ、フルフル』っていつてはいけませんよ」といいました。

じいさんは、家に帰ると、すぐに、

「まだらの雌牛よ、フルフル」といいました。すると家の中のおけや器が、みんな、ミルクでいっぱいになりました。じいさんとばあさんは大よろこびしました。

しばらくして、じいさんは、まだらの雌牛を引いて殿さまのお屋敷に行きました。そして、殿さまの子どもたちに、

『『まだらの雌牛よ、フルフル』ってはいけませんよ』といいました。子どもたちは、

「まだらの雌牛よ、フルフル」といって、遊びだしました。たちまち、屋敷じゅうのおけや器が、ミルクでいっぱいになりました。殿さまはおどろいて、じいさんから雌牛をとりあげてしまいました。雌牛を取られたじいさんは、しょんぼりして帰っていきました。

帰る途中、じいさんは、あの鳥に会いました。そこで、

「お殿さまがまだらの雌牛をとりあげてしまったんだよ」といいました。すると、鳥は、じいさんに赤い皮のふくろをひとつくれて、

「家に帰っても『赤い皮ぶくろよ、ポトポト』ってはいけませんよ」といいました。

じいさんは、家に帰るとさっそく、

「赤い皮ぶくろよ、ポトポト」といいました。すると、家じゅうのおけや器が、お米でいっぱいになりました。

しばらくして、じいさんは、赤い皮ぶくろを持って、殿さまのお屋敷に行きました。そして、殿さまの子どもたちに、

『赤い皮ぶくろよ、ポトポト』といっってはいけませんよ』といいました。子どもたちは、「赤い皮ぶくろよ、ポトポト」といって、遊びだしました。たちまち、屋敷じゅうのおけや器が、お米でいっぱいになりました。殿さまはまた、じいさんから赤い皮ぶくろをとりあげてしまいました。

じいさんが、しょんぼりして家に帰っていると、途中で、あの鳥に会いました。じいさんが、

「お殿さまが、赤い皮ぶくろをとりあげてしまったんだよ」というと、鳥は、こんどは、太い棒ぼうを一本くれて、

『車の心棒しんぼう、あそこにここに』といっではいけませんよ』といいました。

じいさんは、その足で、殿さまの屋敷にもどって行って、子どもたちに、棒をわたしっていました。

『車の心棒、あそこにここに』といっではいけませんよ』

子どもたちは、すぐに、

「車の心棒、あそこにここに」といって遊びだしました。すると、棒は、お殿さまのところへ飛んで行って、お殿さまの周りまわりを、あそこにここにと飛び回りながら、なぐり始めました。

お殿さまは、

「その棒を、あっちへやってくれ」とさげびました。じいさんは、

「それでは、わたしのまだらの雌牛と、赤い皮ぶくろをかえしてください」といいました。お殿さまは、すぐに雌牛と皮ぶくろを返しました。

じいさんは、雌牛を引いて、皮ぶくろと棒を持って家に帰りましたとき。めでたし、めでたし

村上郁再話

資料『モンゴルの昔話』児玉信久・荒井伸一・橋本勝編訳／三弥井書店